日本温泉協会 会員総会

温泉文化シンポジウム/ 岡山県・湯原温泉

温泉文化 ユネスコ無形文化遺産 登録実現への課題は

日本温泉協会は、6月25日に岡山県・湯原温泉で開いた2023年度会員総会に併せて「温泉文化」をテーマにしたシンポジウムを開催した。高崎商科大学特任教授の熊倉浩靖氏をコーディネーターに、パネリストとして、岡山県・湯原温泉の古林裕久氏（プチホテルゆばらリゾート）、岡山県・奥津温泉の鈴木治彦氏（奥津荘）、兵庫県・有馬温泉の金井啓修氏（陶泉御所坊）、秋田県・乳頭温泉郷の佐藤和志氏（鶴の湯温泉）の4人が登壇。それぞれの地域の温泉に関わる文化、「温泉文化」のユネスコ無形文化遺産の登録に対する期待や課題について意見交換した。シンポジウムの主な内容を紹介する。

コーディネーター
高崎商科大学特任教授
熊倉 浩靖 氏

熊倉　「温泉文化」のユネスコ無形文化遺産への登録を進めるに当たって四つの課題が挙がっている。一つ目は、世界の皆さまに分かってもらえるよう、日本の温泉文化をどう定義すればいいのか。二つ目は、登録には温泉文化が日本で守られていることが前提で、日本で守られていてもなお多くの問題に直面しているから、ユネスコ無形文化遺産に登録して世界で共有する必要性があるということをいかに明確にするか。三つ目は、国内法で温泉文化がどう保全されていくのか。四つ目は、温泉関係者だけではなく、温泉を享受する日本国民の社会的な関心として、どのように国民的な運動として形にするか。登録に向けて、知事や国会議員の方々がさまざまな形で動いてくださるのは大きなことだが、私たちは国民的な運動として、温泉の文化や歴史を共有し、大きな力にしていく必要がある。そこでまずは各温泉地の現状についておうかがいしたい。

古林　湯原温泉（岡山県真庭市）の知名度はまだまだ低いが、旅行作家の野口冬人先生が「全国露天風呂番付」をつくった際、「西の横綱」に湯原温泉を選んだ。それを機に全国に知られるようになり、温泉を軸に地域がまとまった。語呂合わせで6月26日を「露天風呂の日」に制定している。

高速道路の整備などで交通アクセスは良くなったが、社会情勢の変化で団体旅行は減少した。昔は旅館が30軒ほどあってにぎやかだったが、今は静かな落ち着いた雰囲気の温泉地だ。家族営業、従業員の少ない施設を中心に、きめの細かいサービスも始まってきている。温泉だけでなく、当地に生息するオオサンショウウオを使ったPRなどで町おこしをしている。

湯原温泉はどんなところかという質問に、地域で働く私たちがきちんと答えられるようにするため、父の古林伸美が「温泉指南役」という資格をつくった。温泉指南役は、温泉の効能や健康増進の知識、万一の事故に備えた救急法、温泉地の歴史などを学んで認定する資格で温泉地づくりに生かされている。

最近では、「温泉むすめ」（全国の温泉地をモチーフにしたキャラクター）をPRに活用している。昔は地域のストーリーを本などで伝えてきたが、最近では映像やキャラクターによる発信が増えてきた。湯原温泉の「温泉むすめ」のキャラクターをよく見ていただくと、アルカリ性の泉質の影響で髪の毛先の色が変わっていたり、たたら製鉄の歴史を踏まえた金属パーツや「温泉指南役」のマークも身に着けていたりする。最初は雰囲気に合わないかと思ったが、ころな温泉地の話を聞き、湯原温泉の町づくりに役立てたい。

鈴木　私たちの奥津温泉（岡山県鏡野町）は、湯原温泉から東に約20㌔ほどのところにあり、湯原温泉とは文化も泉質も似ているところがある。旅館の軒数は8軒で、うち平数は民宿。温泉は配湯ではなく、ほとんどそれぞれの自家源泉で、私の奥津荘は足元湧出でpH9・1のアルカリ性の温泉となっている。

奥津温泉には「足踏み洗濯」という郷土の風習がある。洗濯機や洗剤のない時代に、吉井川沿いの温泉が湧いている場所で、アルカリ性の高い温泉を使って洗濯をしていた。しゃがんで洗濯をすると、獣が出てきた時にすぐに逃げられないということで、女性たちが立ったまま足で洗濯することから「洗濯ダンス」とも呼ばれている。今、足踏み洗濯を実際している方はわずか3人の女性だけ。若い頃に奥津温泉に嫁に来て、おしゅうとめさんから習った洗濯が習慣になって今でも続けている。観光客のお客さまに披露するイベントも行われており、イベントとは別に、実際に洗濯されているところに宿泊客のお客さまをご案内することもある。こうした地域の文化に触れていただけるような機会も創出している。

岡山県・奥津温泉
奥津荘
鈴木 治彦 氏

岡山県・湯原温泉
プチホテルゆばらリゾート
古林 裕久 氏

兵庫県・有馬温泉
陶泉御所坊
金井 啓修 氏

秋田県・乳頭温泉郷
鶴の湯温泉
佐藤 和志 氏

金井　有馬温泉（兵庫県神戸市）は、標高千㍍ぐらいの六甲山の北側、標高400㍍ぐらいまでの斜面に旅館・ホテルが43年前まで鍋、釜、ふとんを持って自炊をするというのがほとんどだった。湯治は、本来は田植えが終わった後や、稲刈りが終わった後、1カ月ぐらいゆっくり温泉に入って体を癒やすというものだった。乳頭温泉郷の7軒のそれぞれの温泉の効能は、お客さんがそれぞれに長い間に口伝えされ、今回はここの温泉というように、医者の代わりで生活の知恵として温泉を利用してきた。

温泉はただのレジャーではなく、体に効くという部分がある。温泉の利用の仕方にも、掛け湯とか、打たせ湯とか、時間をおいて入るとか、いろいろある。生活の知恵として多様な温泉文化が残っているので、それを残しつつ、やはり体に良いということを伝えたい。温泉にはさまざまな物語があるということをユネスコ無形文化遺産への登録を通じて若い世代にも伝えていければと思う。そして日本人だけでなく、外国人にも温泉を楽しんでもらいたい。

熊倉　登録に向けて、日本の温泉文化をみんなが共有できる物語にするにはどうすべきか。

金井　温泉文化といっても、湯に入ることに焦点が当たっているように思うが、おもてなしという部分もあると考えた。

中間取りまとめの一部は次の通り。

【はじめに】

現在、日本国内には約3千の温泉地があり、そこには約1万3千もの温泉宿泊施設がある。しかし、その数は、人口減少、高齢化、後継者不足などにより、2010年をピークに減少傾向にある。

また、国の基幹産業の一つとして位置付けられ、観光立国実現に向けた施策が展開されてきた観光産業も、新型コロナウイルスの影響を大きく受け、コロナ禍における2021年の国内旅行消費額は、2019年比58・1%減の9兆1835億円となり、2010年以降で最低値を記録した。新型コロナウイルスによる需要減は、徐々に回復傾向にある一方で、旅館・ホテルからは急速なリバウンド需要に耐えうる働き手の不足を危惧する声もある。

温泉文化を守り、伝えていく役割を担う旅館・ホテル業をはじめとする温泉関係者は、厳しい状況に置かれており、そこで育まれてきた温泉文化も失われてしまう恐れがある。

この現状を一刻も早く打開するため、温泉文化のユネスコ無形文化遺産代表的な一覧表」への記載）を契機として、コロナ禍から力強く立ち直り、温泉地の再生と温泉文化の保護・継承に全力で取り組むことが求められる。

そして、温泉の文化的価値を見つめ直し、温泉地で働く人々の誇りと希望を一層強く、大きくしていくことを期待する。

【概要】

①温泉文化は、「自然の恵みである温泉を通して、心と体を癒やす、日本国民全体の幅広い生活文化」である。ユネスコ無形文化遺産への提案に当たっては、先行事例である「フィンランド式サウナの伝統」を参考にユネスコに向けた提案書を準備すること。

②法的保護措置についてまずは、文化財保護法（登録無形文化財）によるものとすること。

③文化財保護法による無形文化財の登録に当たっては「定義・わざ・担い手」と国民の意識を把握するため、文献や悉皆調査により調査研究を実施すること。

④温泉文化に関する積極的な情報発信に努め、国民全体の機運を醸成すること。

多様な地域の個性が「温泉文化」 温泉の価値を見つめ直す機会に

◆登録推進の動き

「温泉文化」をユネスコ無形文化遺産に登録しようという機運は、2018年ごろに群馬県で高まりだし、19年には日本温泉協会の会員総会で登録を推進することが決議された。その後、コロナ禍で進展がなかったが、全国温泉振興議員連盟（会長・中曽根弘文参院議員）での議論などを経て、22年11月に「温泉文化」ユネスコ無形文化遺産登録推進議員連盟（衛藤征士郎衆院議員）、「温泉文化」ユネスコ無形文化遺産登録を応援する知事の会（会長・蒲島郁夫熊本県知事）が発足した。民間側では、日本温泉協会、日本旅館協会、全国旅館ホテル生活衛生同業組合連合会の呼び掛けで23年4月に「温泉文化」ユネスコ無形文化遺産全国推進協議会（会長・笹本森雄日本温泉協会会長）が設立された。関係者による政府、国会議員への要望の結果、政府が6月に閣議決定した「骨太の方針2023」には、「温泉」が文化資源であることが明記された。

◆早期登録への提言

日本温泉協会が設置した有識者会議「温泉文化のユネスコ無形文化遺産登録に向けた検討会」（座長・青柳正規多摩美術大学理事長、元文化庁長官）は7月11日、早期の登録実現に向けた提言の中間取りまとめを発表した。中間取りまとめに基づき、政府などに登録申請への準備、温泉文化の保護措置の検討、温泉文化の調査・研究を求めた。

古林　湯原温泉は、温泉の効能や健康増進の知識、万一の事故に備えた救急法、温泉地の歴史などを学んで認定する資格で温泉地づくりに生かされている。

最近では、「温泉むすめ」（全国の温泉地をモチーフにしたキャラクター）をPRに活用している。昔は地域のストーリーを本などで伝えてきたが、最近では映像やキャラクターによる発信が増えてきた。湯原温泉の「温泉むすめ」のキャラクターをよく見ていただくと、アルカリ性の泉質の影響で髪の毛先の色が変わっていたり、たたら製鉄の歴史を踏まえた金属パーツや「温泉指南役」のマークも身に着けていたりする。最初は雰囲気に合わないかと思ったが、ころな温泉地の話を聞き、湯原温泉の町づくりに役立てたい。

鈴木　私たちの奥津温泉（岡山県鏡野町）は、湯原温泉から東に約20㌔ほどのところにあり、湯原温泉とは文化も泉質も似ているところがある。旅館の軒数は8軒で、うち平数は民宿。温泉は配湯ではなく、ほとんどそれぞれの自家源泉で、私の奥津荘は足元湧出でpH9・1のアルカリ性の温泉となっている。

奥津温泉には「足踏み洗濯」という郷土の風習がある。洗濯機や洗剤のない時代に、吉井川沿いの温泉が湧いている場所で、アルカリ性の高い温泉を使って洗濯をしていた。しゃがんで洗濯をすると、獣が出てきた時にすぐに逃げられないということで、女性たちが立ったまま足で洗濯することから「洗濯ダンス」とも呼ばれている。今、足踏み洗濯を実際している方はわずか3人の女性だけ。若い頃に奥津温泉に嫁に来て、おしゅうとめさんから習った洗濯が習慣になって今でも続けている。観光客のお客さまに披露するイベントも行われており、イベントとは別に、実際に洗濯されているところに宿泊客のお客さまをご案内することもある。こうした地域の文化に触れていただけるような機会も創出している。

金井　有馬温泉（兵庫県神戸市）は、標高千㍍ぐらいの六甲山の北側、標高400㍍ぐらいまでの斜面に旅館・ホテルが43年前まで鍋、釜、ふとんを持って自炊をするというのがほとんどだった。湯治は、本来は田植えが終わった後や、稲刈りが終わった後、1カ月ぐらいゆっくり温泉に入って体を癒やすというものだった。乳頭温泉郷の7軒のそれぞれの温泉の効能は、お客さんがそれぞれに長い間に口伝えされ、今回はここの温泉というように、医者の代わりで生活の知恵として温泉を利用してきた。

温泉はただのレジャーではなく、体に効くという部分がある。温泉の利用の仕方にも、掛け湯とか、打たせ湯とか、時間をおいて入るとか、いろいろある。生活の知恵として多様な温泉文化が残っているので、それを残しつつ、やはり体に良いということを伝えたい。温泉にはさまざまな物語があるということをユネスコ無形文化遺産への登録を通じて若い世代にも伝えていければと思う。そして日本人だけでなく、外国人にも温泉を楽しんでもらいたい。

熊倉　登録に向けて、日本の温泉文化をみんなが共有できる物語にするにはどうすべきか。

金井　温泉文化といっても、湯に入ることに焦点が当たっているように思うが、おもてなしという部分もあると考えた。

中間取りまとめの一部は次の通り。

【はじめに】

現在、日本国内には約3千の温泉地があり、そこには約1万3千もの温泉宿泊施設がある。しかし、その数は、人口減少、高齢化、後継者不足などにより、2010年をピークに減少傾向にある。

また、国の基幹産業の一つとして位置付けられ、観光立国実現に向けた施策が展開されてきた観光産業も、新型コロナウイルスの影響を大きく受け、コロナ禍における2021年の国内旅行消費額は、2019年比58・1%減の9兆1835億円となり、2010年以降で最低値を記録した。新型コロナウイルスによる需要減は、徐々に回復傾向にある一方で、旅館・ホテルからは急速なリバウンド需要に耐えうる働き手の不足を危惧する声もある。

温泉文化を守り、伝えていく役割を担う旅館・ホテル業をはじめとする温泉関係者は、厳しい状況に置かれており、そこで育まれてきた温泉文化も失われてしまう恐れがある。

この現状を一刻も早く打開するため、温泉文化のユネスコ無形文化遺産代表的な一覧表」への記載）を契機として、コロナ禍から力強く立ち直り、温泉地の再生と温泉文化の保護・継承に全力で取り組むことが求められる。

そして、温泉の文化的価値を見つめ直し、温泉地で働く人々の誇りと希望を一層強く、大きくしていくことを期待する。

【概要】

①温泉文化は、「自然の恵みである温泉を通して、心と体を癒やす、日本国民全体の幅広い生活文化」である。ユネスコ無形文化遺産への提案に当たっては、先行事例である「フィンランド式サウナの伝統」を参考にユネスコに向けた提案書を準備すること。

②法的保護措置についてまずは、文化財保護法（登録無形文化財）によるものとすること。

③文化財保護法による無形文化財の登録に当たっては「定義・わざ・担い手」と国民の意識を把握するため、文献や悉皆調査により調査研究を実施すること。

④温泉文化に関する積極的な情報発信に努め、国民全体の機運を醸成すること。

古林　皆さんのお話を聞いて、一番大切なのはストーリーという気がした。湯原温泉をはじめ、地域が抱えているさまざまな課題をどう解決していくのかというと、地元の方々だけではなく、外部の方に見てもらうことが大事ではないか。そうしないと他との違いが分からない。湯原温泉を見てもらい、ストーリーを知っていただく。そして一緒に温泉地を盛り上げていきたい。今日ここには全国各地の温泉のプロフェッショナルの方が集まっているが、みんなで課題を共有することが大事だ。それがユネスコ無形文化遺産の登録にもつながっていく。

鈴木　ユネスコ無形文化遺産登録というのは、個々の地域が頑張ってもできないことなので、全国的な組織である日本温泉協会が、各地の温泉組合などの理解を得ながら、国民的なムーブメントにしていくことが重要だ。日本の温泉文化を世界に発信していく良い機会だと思っているが、世界の方々に知っていただく前に、われわれ日本国民が温泉文化というものに親しむということがもっと必要ではないか。また、登録されたと仮定して、登録後すぐは盛り上がるが、10年後に何を描いていくのかというところをしっかり最初からデザインしていく必要がある。皆さまと知恵を絞って一緒に取り組んでいきたい。

熊倉　とてもいい視点だ。フィンランドは、サウナ文化をユネスコ無形文化遺産に登録した時、その担い手は550万人のフィンランド国民全員とした。フィンランド人は、自分たちのあらゆる生活がそこにつながって、それが多様性を持ち、次々と新しい文化を育み、それを相互に利用し合っている。だから登録するんだと。登録名は「サウナカルチャー・イン・フィンランド」だ。われわれは「ONSENカルチャー・イン・ジャパン」でいきたい。われわれの温泉は、日本の土地が持っている豊かな資源。それを私たちが生活の中にきちんと組み込んできた。それによって地域の個性、多様な文化をあらわしてきた。そのトータルが温泉文化であり、だから温泉は全国民の共有財産なんだという視点を持つならば、もっと前向きに登録への活動を進めていくことができるはずだ。

日本温泉協会の会員総会・温泉文化シンポジウムが開かれたのは岡山県真庭市・湯原温泉。シンボルは湯原ダムの直下、川沿いに湧く共同露天風呂の砂湯

湯原温泉にある温泉薬師堂。すぐ横から「薬湯」が湧き出ている